



平成23年度（第20回）ブループラネット賞
受賞者記念講演会講演録

ベアフット・カレッジ

村の各世帯に設置した太陽光システムの修復・維持に毎月の分担金を支払うよう地元住民を説得するため、組織的なリーダーシップの技能も養われます。このシステムが初めて設置された地域では、これまでの4年間規則通りに分担金の支払いが行われています。

世界中のエンパワーされたベアフットの女性

特に南半球の途上国における農村の太陽光電化に向けた分かりやすい非集中的なベアフット・アプローチは、パートナーシップなくして実施不可能でした。

インド技術経済協力（ITEC）と呼ばれるインド政府の助成制度の下、約30カ国の途上国から200人以上の非識字のおばあちゃん世代の女性達がベアフット・カレッジで訓練を受けました。2009年から2011年まで、航空代や訓練費用に約70万ドルが費やされています。

ハードウェア（太陽光装置）は、ウガンダ、ニジェール、チャド、エチオピア、ガーナ、モザンビーク、ルワンダ、ブルキナファソ、カメルーン、ケニアを網羅するUNDPのGEF小規模助成プログラムに基づくグローバル協定の下で提供されました。

紹介:

エチオピアのベアフット太陽光発電技術者の一人であるファトゥマ・アブブカー・イブラヒムは、アファール州 バイアヒルの村に住んでいます。彼女は初等教育を受けた20歳の独身で、同居する両親と共に3頭の牛、30匹のヤギ、3頭のラクダを2ヘクタールの土地で飼育しています。2006年7月より、ファトゥマはバイアヒルと周辺の村に設置された90基の太陽光システム、90個の太陽光ランプ、1軒の電気作業場の管理を行っています。

アワティフ・アブドゥラヘマンは、エチオピアのベニシャンゲルの村に住んでいます。ほとんど読み書きのできない25歳の既婚者で3人の息子がおり、家族と共に4ヘクタールの土地で農業を営んでいます。アワティフは家事の傍ら、自分の村とその隣村に80基の太陽光システムを設置、維持、修復に2006年7月より従事しています。

アミナタ・ウォウレットは40歳でマリ共和国のトンブクトゥに位置するティンジャンベーン村に住んでいます。1994年以来未亡人となり、学校教育を受けていないにもかかわらず読み書きができます。服のインディゴ染色、皮製品の作成、ヤギの面倒など別の技能も備えています。

ハジャ・ウォウレットは、10歳の娘を持つ32歳の未亡人です。非識字の彼女はティンジャンベーンで両親と一緒に住んでいます。

アミナタとハジャは、10日間で自分の村の92世帯を太陽光電化しました。ティンジャンベーンは、マリ国内で初めて、農村に住む女性が太陽光発電システムを設置した村となりました。

アジ・カメラはガンビアのカフェンケンにある村に住んでいます。30代の彼女は既婚者で4人の子供を持つイスラム教徒です。第7学年まで学校に通いましたが、その後中退しました。小さな所有地に3匹のヤギ、一頭の牛、4羽の鶏を飼育しています。彼女は1週間で40世帯に太陽光発電システムを設置し、これら装置はこれまで約1年間、稼働を続けています。

ナンシー・カヌはシエラレオネのカントリネに住むイスラム教徒です。6人の子供を持つほとんど読み書きのできない40歳の彼女は、羊とヤギをそれぞれ1頭ずつ飼育しています。彼女はひとりで村の35世帯に太陽光発電システムを設置し、シエラレオネで初の女性太陽光発電技術者となりました。

こうしたエンパワーメントは、インドを超え、その他のアジア諸国やアフリカにも広がっています。過去11年間で、ベアフット・カレッジは農村に住む識字力のない／ほとんどない女性に、太陽光発電システムの組立、設置、修復、維持の訓練を提供してきました。ベアフット・カレッジで半年の太陽光発電トレーニングを受けるために村から選抜された女性達は、ティロニア村で高度な太陽光発電設備の組立、設置、修復、維持を行うための技能と自信を身につけます。そして、彼女らは自分の村に戻り、村の各世帯に太陽光システムを設置します。このようにして、装置の修復や維持用に毎月の分担金を支払う各家庭からの信頼を獲得することができます。

それまでアフガニスタンの非識字の女性が、半年国を離れ、インドで太陽光発電技術者の訓練を受けるという事例はありませんでした。これを2005年に実践したのが、ダイクンディのカタサング村に住む26歳のガル・ザマンです。彼女とその30歳の夫モハメド・ジャンは、ティロニア村に半年滞在しました。二人は小さな土地を所有しており、家族10人を養いながら、年間200日以上日雇い労働者として働いています。二人は村の50世帯を太陽光電化するという歴史的な記録を達成しました。2005年9月から装置は順調に稼働を続けています。

ティロニア村で太陽光発電技術者としての訓練を受け、地元の村の若い女性の模範となった女性達は、太陽光電化を通して追加収入、新しいレベルの自信やリーダーシップを獲得します。電燈のおかげで夜間に手工芸や他の販売用の商品の制作を行うことで、別の追加収入の機会を得ることもできます。

課題と教訓

農村貧困者の知識、技能、実践的知識の適用を重視および尊重することこそ、ベアフット・アプローチが先進的および革新的である所以です。自立した持続可能な農村コミュニティの実現において、これが唯一の方法かもしれません。

農村社会に根ざし、水、空気、土壌、太陽の適切かつ賢明な使用に対して心の底からの尊敬を持つベアフット教育者は、天然資源を無駄／過度に搾取しないやり方の模範を示しました。彼らはまさに、マハトマ・ガンジーの格言「地球は、すべての人の必要を充足せしめても、ひとりの人の欲を満たしきることはできない」の実践者であると言えます。

このアプローチは都市部出身の「専門家」の固定観念を変えるのに大きな影響を与え、貧困層の人々に自力で自分達の問題を見出し解決するという考えに対する彼らの姿勢を変えました。

尊厳ある開発とは、都市からもたらされる技能への依存を減らしつつ自尊心を高めながら行う開発を意味します。ベアフット・アプローチはうまく行きました。その結果を誰もが見て感じ取ることができます。

主要な課題

新しい開発ビジョンの促進

一つ目の課題は、従来とは異なる開発ビジョンが実現可能であることを人々に納得させることでした。同カレッジはその短い歴史を通して、インドの農村出身（世界中の農村出身）の識字力の低い男女でも地元地域にプロフェッショナル・サービスを提供できるのだという事実を都市部の人々に納得させることに全力を尽くしてきました。同カレッジの活動結果から見ても分かることですが、貧困層に対する長年の固定観念、考え方、姿勢を変えるという作業は、非常に骨の折れる活動であることに違いありません。しかし、要職にある多数の人々が、私たちの活動について学び、ティロニア村を訪れ、その活動を直に見学してきました。こうした人々は、ベアフット・アプローチの精神を吸収し、自分が影響力を持つ範囲で同アプローチを普及・拡散しようとするため、キャンパスを訪れる一人一人が同カレッジの進展に寄与していると言えます。

成功への対処

二つ目の課題は、成功への対処です。同カレッジは、読み書きのあまりできない女性が農村に太陽光発電を導入し、形だけの学位を持った太陽光エンジニアよりも適切にこれら装置の管理を行えるということを証明してきました。そうすることで従来の固定観念を覆し、農村開発には正規教育が必要だという思い込みを打ち崩したのです。しかし残念ながら、開発に対する固定観念に対抗することで同カレッジに対する敵対心や妬みを生み、多くの敵を作る結果となりました。

ベアフット・アプローチに最も敵意を持つのは、正規教育を受け、そして得た見当違いの「専門性」を適用しようとするに多くを投資してきた人々なのです。読み書きのできない女性が村レベルで物事を先導および管理できるという考え（概念）は、苦労の末に取得した資格や信頼性の価値を下げ、就職機会を脅かす存在となったのです。実際、ベアフット・アプローチが広く普及しているインドにおける成果の一つが、コスト高なイニシアチブおよび仕事を低コストで集中的なイニシアチブへ置換することで、農村における有給雇用の創出を可能にしています。

失敗から学ぶ

三つ目の大きな課題は、輝かしい失敗から学ぶということです。リスクを負って新しいアイデアを試し、失敗し、再度挑戦するというプロセスを同カレッジは重視しています。私たちは成功と同様に失敗からも学ぶべきと考えているからです。しかし、正規の教育制度では失敗の余地などなく、失敗は不名誉または後悔すべき事と見なされます。ベアフット・カレッジは、参加者に失敗する機会を与え、失敗から学ぶ機会を与えます。どのように優秀な組織でも危機に直面することがあり、こうした危機的状況は組織を粉々に破壊することもあれば、究極的に強化することもあります。1980年代初頭、同カレッジの意思決定が、都市部の

専門家（この多数が別の組織に移るか、正規の制度に戻っていきました）から農村の若者に徐々に移管されていきました。これは不確実性と不安定さを招く危機となりましたが、同カレッジはこの状況から、将来の意志決定について方向付けをし、影響を与えることとなった二つの重要な教訓を学び取りました。

1. 村に生涯残って生活するわけではない都市部出身の専門家に依存しないこと。物質主義に支配された世界では、彼らには実入りのいい仕事に就くため同カレッジを足掛かりに利用するという誘惑もあるでしょう。重要なのは、農村の貧しい人々の能力、自信、技能を養い、地元の村に自らサービスを提供できるようにすることなのです。結局のところ、都市部で訓練を受けた医師、教師、エンジニアが村に来る前から、農村住民は代々受け継がれ試練に耐えてきた知識や技能を堅持してきたのです。同カレッジの方針として、この方向に進んでいかない手はありません。そしてこれこそ、私たちが実践したことであり、同カレッジ成功のカギとなりました。

2. 自信がないときには最善の努力をすること。追いつめられた状況で、行き場所も頼る人もいない時、結果を直視するほかに選択の余地はありません。危機が発生して暴力に発展する可能性がある場合、通常、都市部出身の専門家にはそこにとどまる力がありません。別に逃げ場所があるため、危機に直面する準備ができていないのです。

多くの側面でベアフット・カレッジは、より公正で創造的な世界の小宇宙であると言えます。私たちは特に、精神的および身体的障害を持つ人にも、健全な人と同じ、就労と社会に参加する機会を与えることを重視しています。薬の投与が必要だが、市場価格で購入できない人にはその1割、その支払い能力もない人は無料で、医療センターから薬を受け取ることができます。オフィスの不要となった紙は、袋、ペン立て、折り紙、教材などに再利用され、地元の夜間学校に供給されます。オフィスの設備、扇風機、照明はオフィスの屋根に設置した太陽光パネルで発電された電気で作動し、宿舎の電気も太陽光パネルから電力供給しています。飲料水や衛生設備のニーズは、屋根の雨水採取槽と手押しポンプで充足されています。雨どいのネットワークで採集した雨水を大きく開口した井戸に流し込むことで地下水位（量）を維持する貯水システムを使用し、地元地域の環境強化に寄与しています。捨てられた点滴用のボトルとチューブは殺菌し、半砂漠地域にある同キャンパスの植物の灌漑に使用されます。

ベアフット・カレッジは、マハトマ・ガンジーが初めて提唱した、「貧困地域を開発するためのリソースは同地域の中に存在する」というアイデアを実践するものです。コミュニティを抜本的に変え、生活の質の改善を実現するにあたって、外部から人材、技術、金銭といったリソースを持ち込む必要はないのです。農村社会に存在するリソースは、正規の教育制度の要件に合致していないという理由で、あまりにもしばしば無視、軽蔑、劣ると見なされがちです。

しかしながら同カレッジは、学歴が全く／ほとんどないあらゆる男女が、地元社会に基本サービスを提供するための術を学べるのだということを実証してきました。自分は何もできないと思込まされてきた農村の貧困層の固定観念を変えたということは大きな貢献です。途上国は、このベアフット・アプローチを適用することで膨大な利益を享受することができるでしょう。開発に係る役人の見方を変えるだけでなく、何よりも農村に住む貧困者の思考を変えることができます。生活改善に向けた「自分たちで（やれば）できる」という姿勢を植え付けながら、彼らの能力を尊重しない無責任な制度との長年の衝突で彼らが感じてきた無気力と絶望感を払拭するのです。

最初は、人に無視され、次には笑われ、そして戦いを挑まれる。それから、あなたが勝つのだ。

—マハトマ・ガンジー



公益財団法人 旭硝子財団

〒102-0081 東京都千代田区四番町5-3 サイエンスプラザ2F

THE ASAHI GLASS FOUNDATION

2nd Floor, Science Plaza, 5-3, Yonbancho
Chiyoda-ku, Tokyo 102-0081, Japan

Phone 03-5275-0620 Fax 03-5275-0871

E-Mail post@af-info.or.jp

URL <http://www.af-info.or.jp>